

## ジョコウイ新政権の歴史的特色（巻頭エッセイ）

著者	加納 啓良
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	241
ページ	1-1
発行年	2015-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003084">http://hdl.handle.net/2344/00003084</a>

加納 啓良

### ジョコウィ新政権の歴史的特色

インドネシアでは、二〇一四年七月の正副大統領選挙を経て、同年一〇月にジョコ・ウィドト新大統領のもとで、「勤労内閣」(カビネット・クルジャ)と称する新内閣が発足した。この通称ジョコウィ政権の歴史的特色について考えてみたい。

ジョコウィは、一九四五年八月のインドネシア共和国発足以来、初代のスカルノから数えて七人目の大統領である。また、二〇〇四年から導入された国民の直接選挙で選ばれた大統領としては、前任のユドヨノに次いで二人目の指導者となる。これまでと比べて、新大統領の政権にはどういふ特徴がみられるだろうか。過去の六人の大統領のうち初代スカルノを含め四人は、中・東部ジャワ出身のジャワ族が占めている。ジョコウィも中部ジャワの古都スラカルタ出身のジャワ族である。一方、副大統領にはスラウエシ出身のユスフ・カラが選ばれた。副大統領は外島出身者というパターンは、スマトラ出身の初代副大統領ハッタの場合と同じだ。また政権発足時の閣僚の構成を見ると、計三十八人の閣僚(大臣および大臣相当職)のうちジャワ族が一八ないし一九人を占めている。この比率は、前任の第二次ユドヨノ政権(三五人中一三人)に比べると高いが、前政権では副大統領もジャワ族だったことを考えると、異常な比率とはいえない。(二〇〇一年発足のメガワティ政権のときは、三三人中一六人がジャワ族だった。)また、政党所属の閣僚は一四人で、メガワティ政権(一六人)、第一次ユドヨノ政権(一五人)、第二次同政権(一七人)と大差は無い。一方、

閣僚中一五人が博士号保有者と高学歴者が目立つが、これもメガワティ政権の一二人、第一次ユドヨノ政権の一五人、第二次同政権の一三人と大同小異だ。こうしてみると、新政権の人的構成はごくオーソドックスにみえる。

だがこの政権の斬新さは、ジョコウィ大統領自身の経歴にある。過去の四人のジャワ族出身大統領のうち、初代スカルノは、ラデンというジャワ貴族(プリアイ)の称号をもつ父親と、やはり貴族のバリ族の母親のあいだに生まれた。二代目のスハルトは農村出身の平民(ウォン・チリツ)だが、妻が貴族の血統であるとして、プリアイ的世界への近さを演出するのに腐心した。四代目のA・ワヒドは、プリアイに拮抗する名門宗教指導者(キヤイ)の家系出身である。六代目のユドヨノは農村出身だが、父親はやはりラデン称号をもつ下級プリアイだ。これに対して、ジョコウィは古都の出身だが、王家とは血のつながりのない平民で、その迅速果敢な行動様式も伝統的プリアイのものとはほど遠い。中部ジャワのもうひとつの古都ジョクジャカルタにある国立の名門ガジャマダ大学の林学部を卒業し、数年間国営林業公社で働いたが、その後は家業の家具製造業を継いで一大輸出企業にまで育てあげた。独立後国内に設立された一般大学の卒業生で、純然たる民間企業経営の経験者が、大統領の座に就いたのはこれが初めてだ。また、スラカルタ市長、ジャカルタ州知事という地方首長職の経験者が国の最高指導者になったのも初めてで、これらはいずれも独立後七〇年を経たインドネシア社会の成熟と活力を示すものだ。政権の今後の帰趨に注目したい。

かのう ひろよし/東京大学名誉教授

東京大学経済学部卒。1971年、アジア経済研究所入所。主に中・東部ジャワの農村社会経済調査に従事。東京大学東洋文化研究所教授を経て、2012年名誉教授。この間、インドネシアなどにたびたび滞在し、東南アジアの経済、社会、歴史を研究。